

# === T A C S 情報 第6号 ===

(Toyama Agricultural Cultivation Management Information System)

令和8年6月30日

農業技術課 広域普及指導センター

## 1 気象経過

### (1) 気温

5月の平均気温は、19.5℃（対平年差+2.0℃）と平年に比べかなり高かった。

6月上中旬の平均気温は、22.4℃（同+1.6℃）と平年に比べかなり高かった。

6月5半旬の平均気温は、22.2℃（同±0.0℃）と平年並であった。

### (2) 降水量

5月の降水量は、89.0mm（対平年比72%）と平年並であった。

6月上中旬の降水量は、81.5mm（同112%）と平年並であった。

6月5半旬の降水量は、13.5mm（同33%）と平年並であった。

### (3) 全天日射量

5月の平均全天日射量は、21.2MJ/m<sup>2</sup>/日（対平年比115%）と平年に比べかなり多かった。

6月上中旬の平均全天日射量は、20.0MJ/m<sup>2</sup>/日（同109%）と平年に比べ多かった。

6月5半旬の平均全天日射量は、16.8MJ/m<sup>2</sup>/日（同108%）と平年並であった。

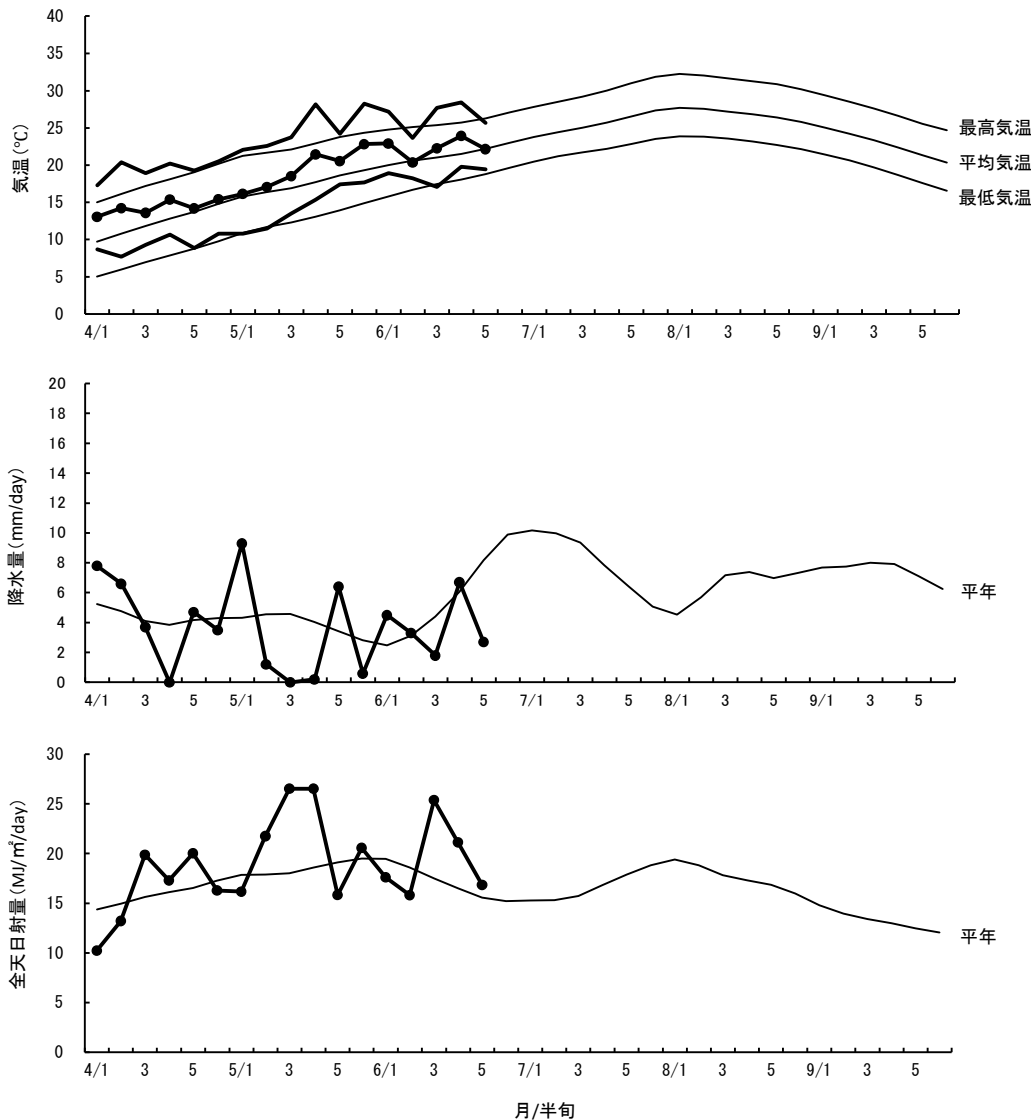


図1 令和8年の気象経過（富山地方気象台）

## 2 生育状況（生育観測ほデータ）

### (1) 富富富

近年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡く、葉齢は0.2葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、近年に比べ、草丈、茎数は並、葉色はやや淡くなっている。

幼穂形成期は、近年に比べ2日早い7月11日と見込まれる。

表1 「富富富」の生育状況（6月30日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD		
R8	5月17日	49.1	27.1	606	10.7	4.2	38.2	(7月11日)	(8月2日)
R7	5月17日	51.2	26.1	573	10.6	4.4	41.2	7月13日	8月5日
近年	5月15日	47.4	27.0	583	10.5	4.4	40.2	7月13日	8月4日
前年比・差	0	96	104	106	0.1	-0.2	-3.0	(-2)	(-3)
近年比・差	2	104	100	104	0.2	-0.2	-2.0	(-2)	(-2)

注1) 近年：H29～R7の平均

注2) R8の幼穂形成期及び出穂期は推定値

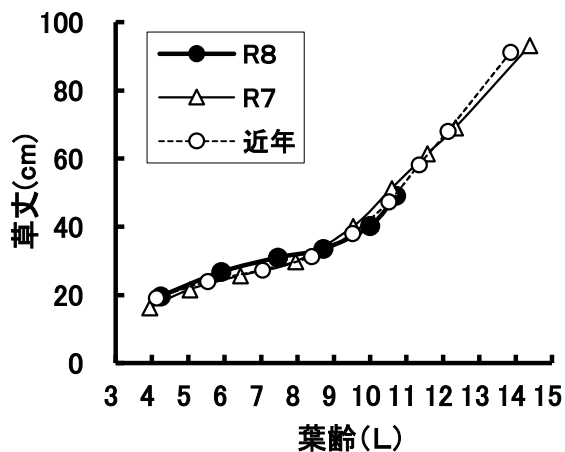


図2 草丈の推移（生観富富富）

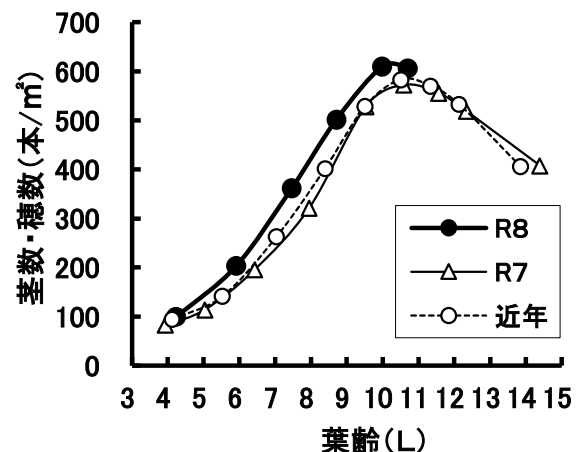


図3 茎数の推移（生観富富富）

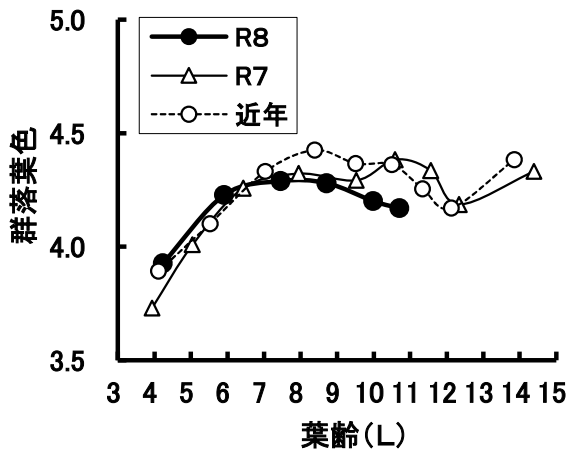


図4 葉色の推移（生観富富富）

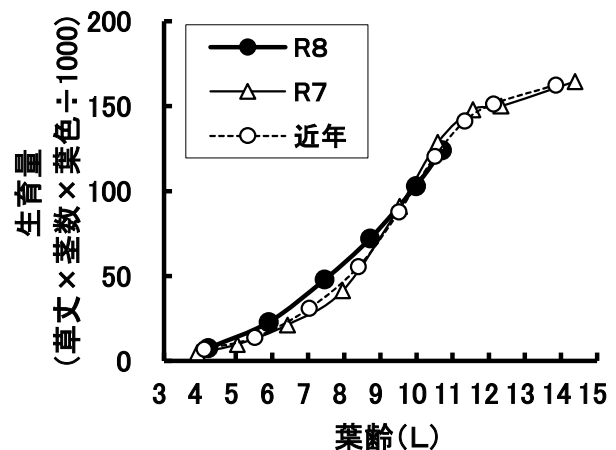


図5 生育量の推移（生観富富富）

(2) コシヒカリ

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数はやや多く、葉色はやや淡く、葉齢は 0.5 葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、葉色は並、茎数はやや多くなっている。  
幼穂形成期は、平年に比べ 5 日早い 7 月 6 日と見込まれる。

表2 「コシヒカリ」の生育状況（6月30日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
R8	5月13日	59.5	27.2	580	11.4	4.1	35.6	(7月6日)	(7月27日)
R7	5月13日	59.9	24.8	533	11.1	4.1	36.9	7月10日	7月31日
平年	5月14日	54.8	25.1	548	10.9	4.2	37.4	7月11日	8月1日
前年比・差	0	99	109	109	0.3	0.0	-1.3	(-4)	(-4)
平年比・差	-1	108	108	106	0.5	-0.1	-1.8	(-5)	(-5)

注1) 平年：H28～R7の平均

注2) R8の幼穂形成期及び出穂期は推定値

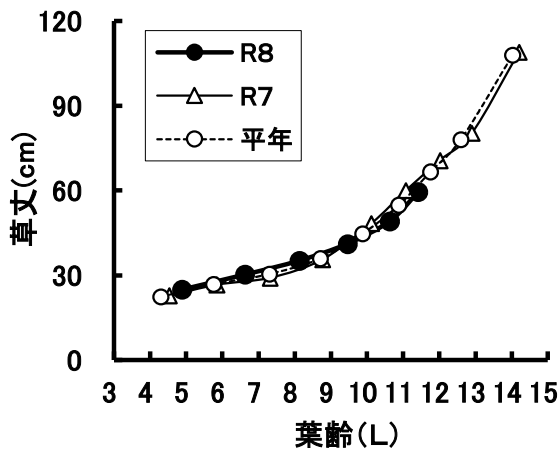


図6 草丈の推移（生観コシヒカリ）

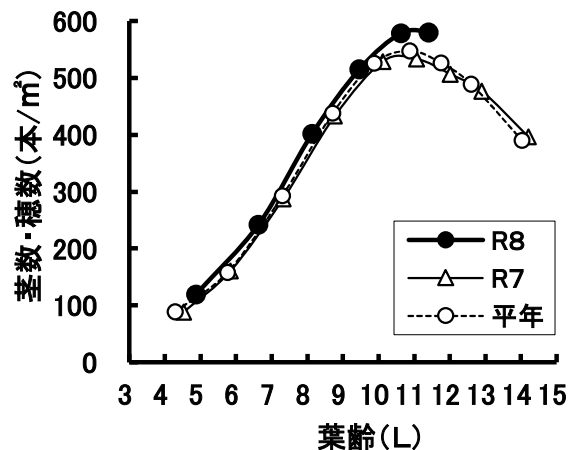


図7 茎数の推移（生観コシヒカリ）

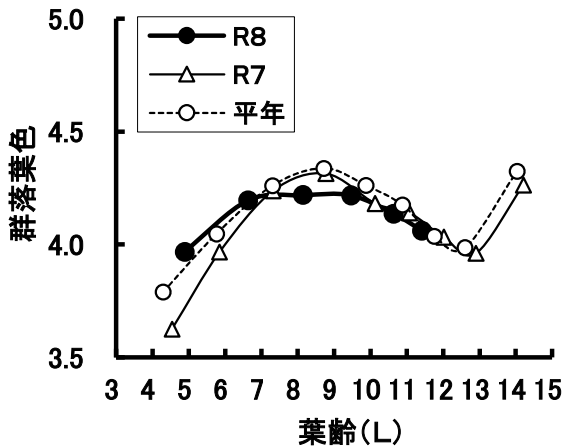


図8 葉色の推移（生観コシヒカリ）

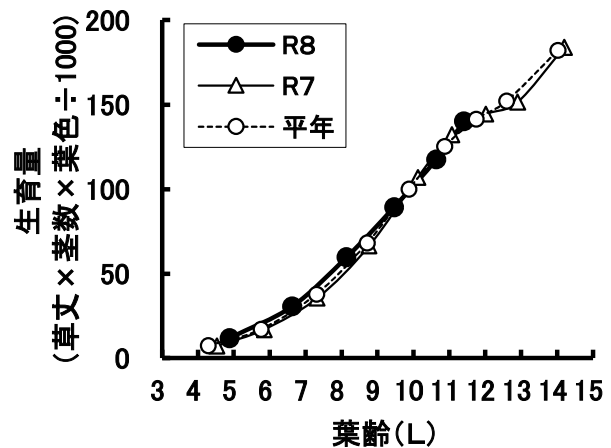


図9 生育量の推移（生観コシヒカリ）

### (3) てんたかく

平年に比べ、草丈はやや長く、茎数はやや少なく、葉色は淡く、葉齢は 0.7 葉進んでいる。

葉齢を揃えて比較すると、平年に比べ、草丈、茎数は並、葉色は淡くなっている。

幼穂形成期は、平年に比べ7日早い6月17日となった。

出穂期は、平年に比べ7日早い7月8日頃と見込まれる。

表3 「てんたかく」の生育状況（6月30日 生育観測ほ）

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/m <sup>2</sup> )		葉色板	SPAD		
R8	4月29日	65.4	28.8	592	12.5	4.1	36.4	6月17日	(7月8日)
R7	4月30日	63.9	28.8	591	11.9	4.3	38.8	6月24日	7月13日
平年	5月1日	61.5	30.3	647	11.8	4.4	39.3	6月24日	7月15日
前年比・差	-1	102	100	100	0.6	-0.2	-2.4	-7	(-5)
平年比・差	-2	106	95	92	0.7	-0.3	-2.9	-7	(-7)

注1) 平年: H28~R7の平均、ただし、幼穂形成期及び出穂期はR2~7の平均

注2) R8の出穂期は推定値

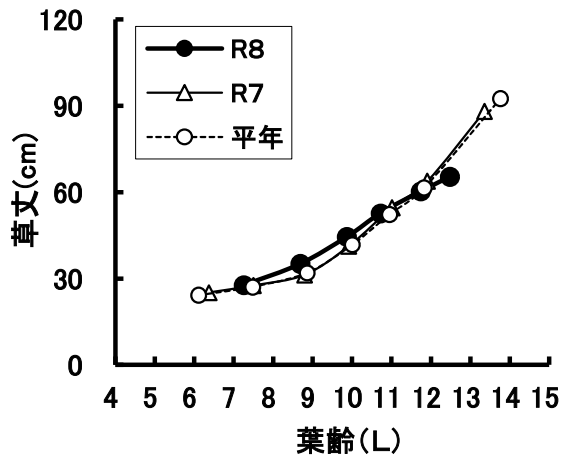


図10 草丈の推移（生観てんたかく）

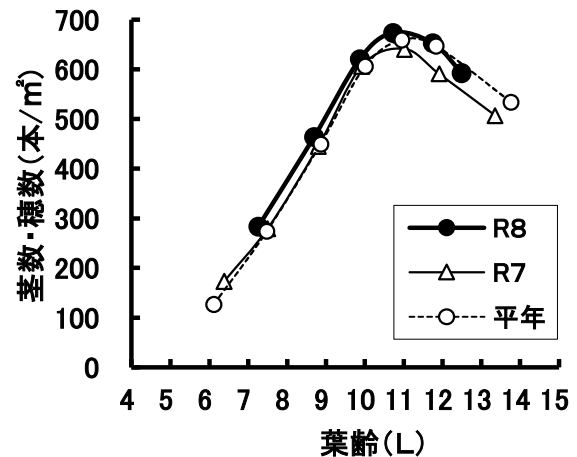


図11 茎数の推移（生観てんたかく）

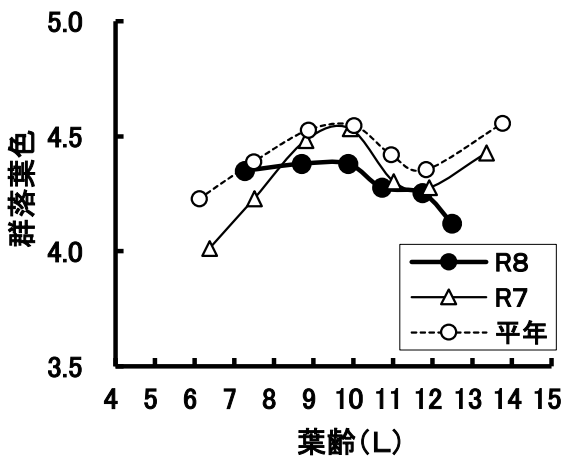


図12 葉色の推移（生観てんたかく）

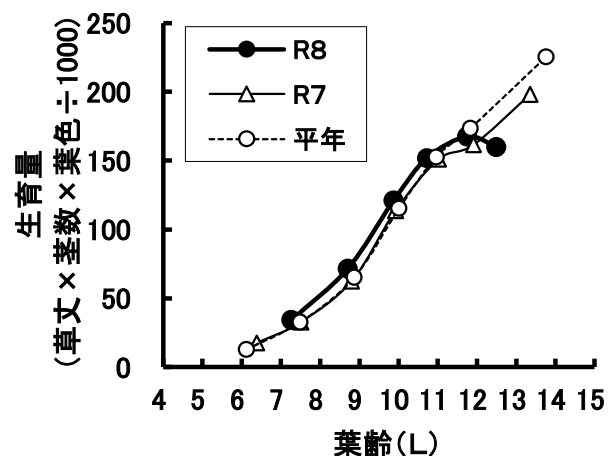


図13 生育量の推移（生観てんたかく）

(4) てんこもり

平年に比べ、草丈は長く、茎数、葉色は並、葉齢は0.5葉進んでいる。  
 葉齢を揃えて比較すると、草丈、茎数、葉色は平年並となっている。  
幼穂形成期は、平年に比べ3日早い7月9日と見込まれる。

表4 「てんこもり」の生育状況(6月30日 生育観測ほ)

年次	田植日 (月/日)	草丈 (cm)	茎数		葉齢	葉色		幼穂 形成期	出穂期
			(本/株)	(本/㎡)		葉色板	SPAD		
<b>R8</b>	<b>5月9日</b>	<b>53.2</b>	<b>35.9</b>	<b>704</b>	<b>12.4</b>	<b>4.1</b>	<b>37.6</b>	<b>(7月9日)</b>	<b>(7月31日)</b>
R7	5月12日	48.3	34.7	676	11.6	4.3	38.7	7月14日	8月5日
平年	5月9日	47.7	35.7	684	11.9	4.2	37.6	7月12日	8月3日
前年比・差	-3	110	103	104	0.8	-0.2	-1.1	(-5)	(-5)
平年比・差	0	111	100	103	0.5	-0.1	0.0	(-3)	(-3)

注1)平年：H28～R7の平均

注2)R8の幼穂形成期及び出穂期は推定値

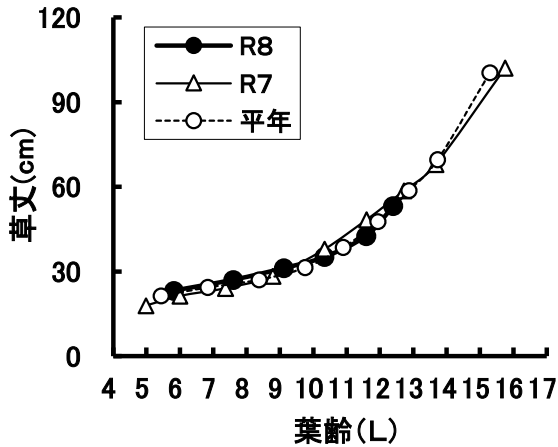


図14 草丈の推移(生観てんこもり)

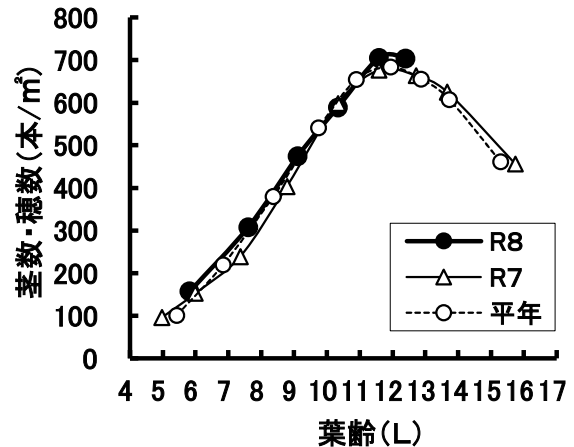


図15 茎数の推移(生観てんこもり)

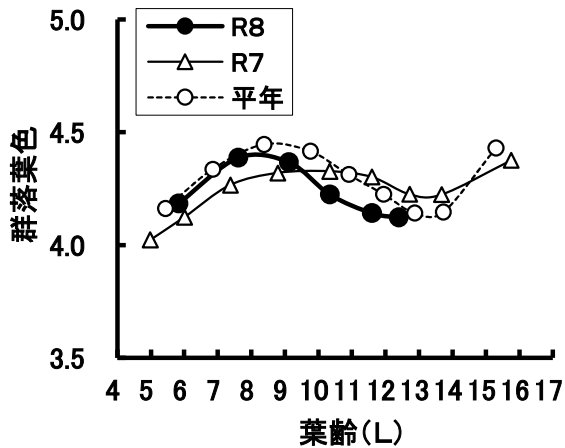


図16 葉色の推移(生観てんこもり)

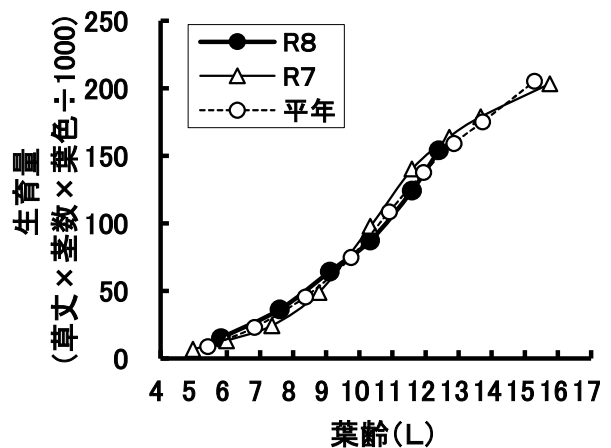


図17 生育量の推移(生観てんこもり)

### 3 当面の技術対策

- ・葉色を維持するため、中干し後の間断かん水では落水期間が長くなり過ぎないように注意し、幼穂形成期頃までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは、稲体活力を維持するため飽水管理を徹底する。
- ・現在、葉色が淡くなっており、今後の高温が予報されていることから、肥効調節型基肥栽培では葉色診断に基づき追加穂肥を積極的に施用する。
- ・いずれの品種も生育がかなり早くなっており、出穂期や成熟期が早まると見込まれることから、追肥、防除及び刈取り計画の前倒しを検討する。

#### (1) 幼穂形成期前後の水管理

- ・葉色を維持するため、中干し後の間断かん水では落水期間が長くなり過ぎないように注意し、幼穂形成期までに足跡の深さ 3 cm 程度の土壌硬度に誘導する。
- ・幼穂形成期から出穂期までは肥効調節型基肥肥料の穂肥成分の溶出量が多くなることから（図 18）、肥料の吸収効率を高めて稲体活力を維持するため、飽水管理（足跡に水が残る程度の湿潤状態を維持）を徹底する（図 19）。

#### <今後の水管理のイメージ>

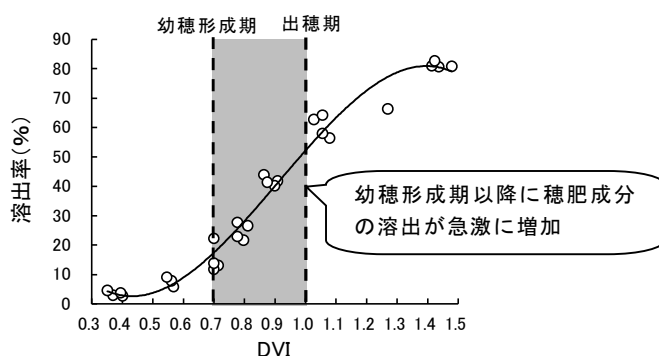
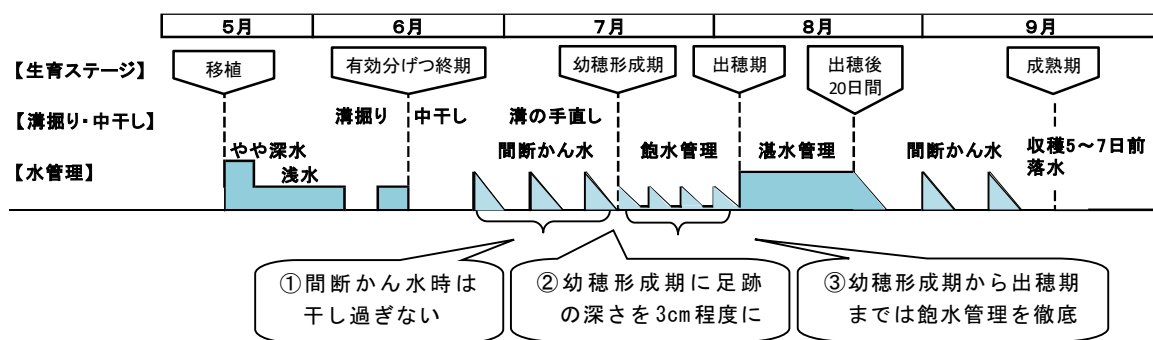


図 18 コシヒカリ用肥効調節型基肥肥料の穂肥成分の溶出量の推移 (H29、H30、R2、R3 農研)

注) 穂肥成分: JSD (80)、JSE (100)



図 19 飽水管理のイメージ

#### (2) 肥効調節型基肥栽培における追肥対応

##### ア 「富富富」

- ・現在、平年に比べ葉色 (SPAD) が低下していることから（図 20）、葉色診断に基づき追加穂肥を施用する。
- ・追加穂肥は、幼穂形成期後 14 日（出穂前 7 日）頃の群落葉色が 4.2 (SPAD32) 以下の場合、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度施用する。

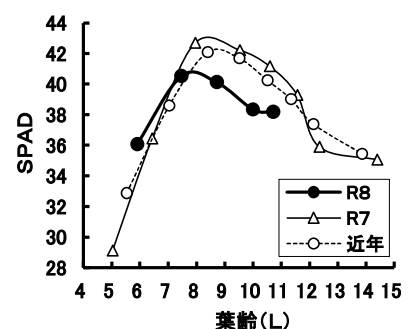


図 20 葉色 (SPAD) の推移 (生観富富富)

## イ 「コシヒカリ」

- ・現在、葉色がやや淡く、今後の高温が見込まれることから、葉色診断に基づき積極的に追加穂肥を施用する。
- ・砂壌土では、幼穂形成期後 10 日頃（出穂前 12～10 日）または幼穂形成期後 14 日（出穂前 7 日）頃の葉色が淡い場合は、速やかに窒素成分で 1.0kg/10a を施用する（表 5）。
- ・砂壌土以外の土壌では、幼穂形成期後 14 日（出穂前 7 日）頃の葉色が淡い場合は、出穂 3 日前までに追加穂肥を窒素成分で 0.7～1.0kg/10a を施用する（表 5）。

表 5 「コシヒカリ」の肥効調節型基肥栽培における追加穂肥の目安

土壌タイプ	葉色診断基準		追加穂肥	
	幼穂形成期後10日 (出穂前12～10日)	幼穂形成期後14日 (出穂前7日)	施用量 (kg/10a)	施用時期
砂壌土	群落葉色4.0以下 SPAD32以下	群落葉色4.2以下 SPAD34以下	1.0	診断後速やかに (遅くとも出穂3日前まで)
砂壌土以外	—	群落葉色4.0以下 SPAD32以下	0.7～1.0	出穂3日前まで

砂壌土では、高温が見込まれ、早期に葉色が低下している場合は、早めの追加穂肥を行う

## ウ 「てんたかく」

- ・現在、葉色が淡くなっていることから、葉色診断を実施し、葉色が 4.0 未満（砂壌土は 4.2 未満）と淡い場合は、出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行い、穂揃期の葉色を 4.2～4.5 程度に誘導する。

## エ 「てんこもり」

- ・幼穂形成期以降に葉色が 4.0（砂壌土は 4.2）を下回らないよう、葉色が淡いほ場では出穂 3 日前までに窒素成分で 1.0kg/10a 程度の追肥を行う。

### (3) 作業計画の前倒し

- ・いずれの品種も生育がかなり早くなっており、幼穂形成期、出穂期及び成熟期が早まると見込まれることから、追肥、防除及び刈取りの計画を前倒しにするよう検討する。

### (4) 病虫害防除の徹底

#### ア 斑点米カメムシ類

- ・現在、畦畔・雑草地及び本田における斑点米カメムシ類がかなり多いため、速やかに畦畔等の草刈りを行う（6月24日 病虫害防除技術情報第2号）。
- ・早生品種の出穂が平年に比べ7日程度早まることが予想されるため、防除計画を早め、穂揃期（出穂3～5日後頃）とその7日後の傾穂期の2回防除を徹底する（表6）。また、例年カメムシ類の発生密度が高い地域では、予め追加防除を計画に組み込む。
- ・近隣に雑草地や麦あと不作付地等があると、斑点米カメムシ類が侵入するおそれがあるので防除を徹底する。
- ・本田内のノビエやホタルイは斑点米カメムシ類の繁殖源となるため、水田内雑草の発生状況に注意し適切な除草対策を行う。

表6 「てんたかく」の防除時期の目安

年次	出穂期	本田防除	
		1回目 (穂揃期)	2回目 (傾穂期)
R8	(7/8)	(7/11)	(7/18)
近年	7/15	7/18	7/25

注) 括弧書きの日付は推定値

イ 紋枯病（紋枯病の初発確認日 平年：7月3日、R8：6月18日）

- ・前年多発したほ場などでは、出穂3～4週間前の粒剤散布や穂ばらみ期の防除を行う。
- ・本田防除は要防除水準に基づき防除要否を判定し（表7）、適期に薬剤が株元まで付着するように散布する。
- ・箱施薬剤と本田防除の体系防除を行う場合は、同一系統薬剤を連用しない。

表7 紋枯病の薬剤散布適期と要防除基準

品種	要防除水準 (発病株率)	薬剤散布適期 (防除要否判定時期)
てんたかく	5%	出穂14日前頃
コシヒカリ・富富富	15%	出穂10日前頃
てんこもり	15%*	出穂7日前頃

ウ いもち病（葉いもちの初発確認日 平年：7月9日、R7：7月2日）

- ・現在、県内でいもち病の発生は確認されていないが、BLASTAM情報（農業研究所）を参考に、常発地を中心に巡回し、葉いもちの発生がみられたら直ちに防除する。



BLASTAM情報  
(葉いもち予測システム)  
はこちらから

エ 白葉枯病

- ・常発地等では、出穂3～4週間前にオリゼメート1キロ粒剤等を散布する。
- ・ほ場が浸水や冠水した場合は、白葉枯病が発生しやすくなるため薬剤を散布する。

オ 稲こうじ病

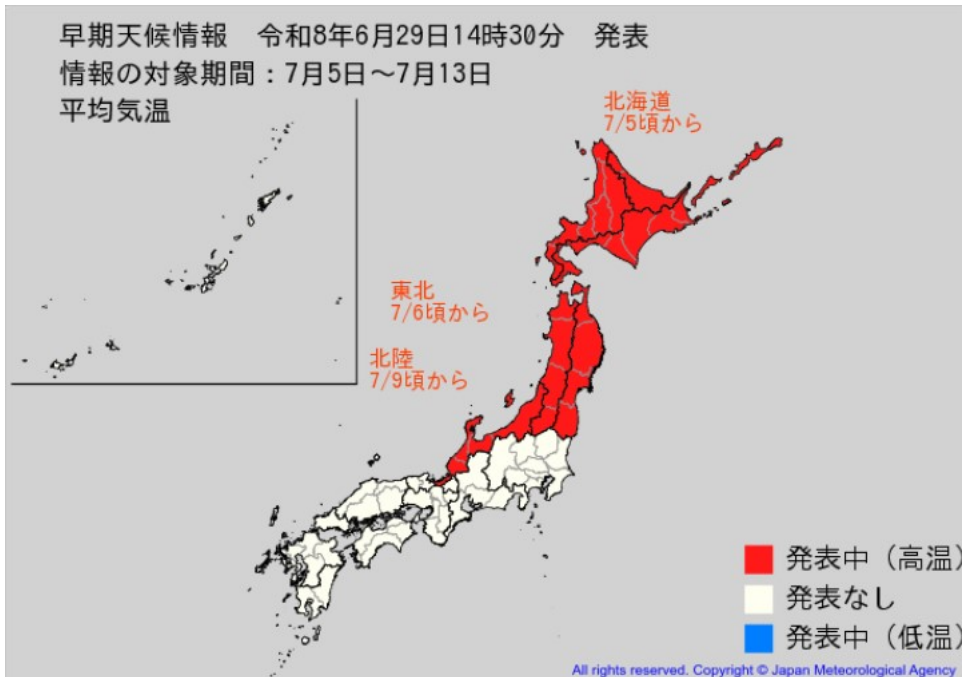
- ・常発地や前年に発生が多かったほ場では、出穂の10～15日前（銅剤は出穂の10～20日前）に薬剤防除を行う。

カ 着色米（斑点米を除く）、ごま葉枯病

- ・稲体活力の低下により発生が助長されることから、適正な施肥、水管理を行う。

農薬散布に際しては、周辺住民への事前の周知と農薬の飛散防止を徹底する。

[参考 新潟地方気象台 高温に関する早期天候情報（北陸地方）（令和8年6月29日）]



高温に関する早期天候情報（北陸地方）

令和8年6月29日14時30分

新潟地方気象台 発表

北陸地方 7月9日頃から かなりの高温  
かなりの高温の基準：5日間平均気温平年差 +2.7℃以上

北陸地方の気温は、向こう1週間程度は平年並ですが、その後は暖かい空気に覆われやすいため高く、7月9日頃からはかなり高くなる可能性があります。

農作物や家畜の管理等に注意してください。また、熱中症対策など健康管理に注意してください。

なお、1週間以内に高温が予測される場合には気象解説情報（高温）を、翌日または当日に熱中症の危険性が極めて高い気象状況になることが予測される場合には熱中症警戒アラートを発表しますので、こちらにも留意してください。